

# 曾良随行日記から眺める

## 松尾芭蕉おくのほそ道

恒 松 侃

### 一、河合曾良おくのほそ道旅行 随伴記録の名称

松尾芭蕉のおくのはそ道旅行に随伴した河合曾良は、元禄二年（1689）三月二十日、江戸深川出船から八月五日加賀国山中で芭蕉と別れるまでの行程と、八月六日から単独行動になった加賀国全昌寺から、八月十四日美濃国大垣着までの行程、更に伊勢国長島に行き、再度大垣に戻って九月六日芭蕉と共に大垣を出船する全行程を記録に認めた。それには見学・参詣・句会・宿泊地・立ち寄り箇所・関係人物から日日の天気状況に至るまで、一日と欠かす事なく、全てが記録されている。

しかしこの記録書には特定の名称が付けられる事がなく、長い間無題であった。その為後に研究者・注釈者達によって種々の名称が付けられたが、最も一般的な名称とし

て曾良随行日記が付けられ、本稿においてもその名称を使用する事にする。

### 二、おくのほそ道収録の松尾芭蕉詠句数

おくのほそ道に収録されているおくのほそ道旅行中の各人の詠句数は、左表の如くである。松尾芭蕉の詠句数は五十一句である。

|      |      |                   |
|------|------|-------------------|
| 松尾芭蕉 | 五十一句 | しかしおくのほそ道旅行中における  |
| 河合曾良 | 十句   | 芭蕉の詠句数は、この五十一句だけで |
| 低耳   | 一句   | はない。おくのほそ道旅行中、松尾芭 |
| 計    | 六十二句 | 蕉は一〇四句詠んでいる。その中の  |

五十一句を、おくのほそ道収録句としている。他の五十三句は、泊船集や真蹟壞紙等に収録されていて、その合計

数がおくのほそ道旅行中の松尾芭蕉の詠句数である。更に曾良随行日記には、芭蕉の詠句八十六句が収録されている。この八十六句のうち四十五句が、前掲の一〇四句と重複している。この四十五句を差し引いた四十一句が、曾良随行日記単独の松尾芭蕉詠句になり、この四十一句と前掲の一〇四句を加えた一四五句が、最終的なおくのほそ道旅行中の松尾芭蕉の詠句数になる。従っておくのほそ道旅行中の松尾芭蕉詠句数は、おくのほそ道収録句よりも九十四句多い事になり、言い換えれば松尾芭蕉はおくのほそ道執筆に当たって、旅行中の詠句九十四句を除去した事になる。何故にこのような現象が生じたのであろうか。除去句九十四句の全てがそうだとは言いつれないが、例えば松島見物の場合、芭蕉は曾良には「松島や鶴に身をかれ郭公」と詠ませていながら、「予は口をとちて眠らんとして」と言つて句作を諦めている。かと言つて眠る事も出来ず、そうかと言つて句作も出来ない程、芭蕉は松島的美観に心を奪われて、その情景の素晴らしさを強調しているが、実際には芭蕉は「嶋ぐくや千々にくだきて夏の海」〔蕉翁全伝付録〕と、松島湾の様々な形をした島々が湾内に散在している情景を詠じている。この句がおくのほそ道に収録されなかった理由について、新編小学館日本古典文学全集では、「この句の情景は松島湾紹介の文章中に描写されているので、自然とこの句を入れる必要がなくなった。」と説明してい

る。後にこのおくのほそ道旅行で、芭蕉は象潟を訪れ、ここでは芭蕉は二句も詠み、曾良も二句、更に美濃国の商人低耳も一句詠んで、全とおくのほそ道に収録しているが、松島の情景は散文で、象潟の情景は韻文でもって両者を対比させ、それぞれ異なった技法で情景美を対比させて、両者の紹介を行ったのかもしれない。また松島のこの風光明媚な情景を、芭蕉がどのように句に詠むであろうかと、人々の期待を裏切らせる事によって、人々の心と期待を煽り、更に情景美を連想させて、却つて松島的美観を強調させる結果を見る方法をとつたのかもしれない。それは恰も百人一首の絵札（読み札）を、唯一小野小町だけ後ろ向きに描いて、小野小町の面を連想させる方法に類似していないだろうか。あの方法でもって、松尾芭蕉は敢えておくのほそ道本文に、松島での詠句を収録しなかったとも考えられる。芭蕉自身、芭蕉が所有している瀟湘八景や西湖十景の美観は、芭蕉が連想する事によって得た美観である。芭蕉はその方法でもって発句の連想の中に、松島的美観を連想展開させ、読者に松島的美を与えたのではなからうか。

### 三、おくのほそ道と曾良随行日記との対比

河合曾良は江戸深川出立から加賀国山中に至るまで、そして単独旅行になった山中から越前国敦賀、更に敦賀から

木之本・彦根・関ヶ原を経由して美濃国大垣、そして伊勢国長島、再び大垣に戻つて九月六日芭蕉と共に伊勢に向かうまで、一日も欠かす事なく、特記すべき事項のない場合は、その日の天候状態のみ日記に留めていた。その記録は詳細に、几帳面に記されている。その曾良随行日記と、おくのほそ道の対比部分を記してみる。

曾良随行日記

| 月日   | 日記内容                    |
|------|-------------------------|
| 三 20 | 深川出船。巳ノ下尅、千住ニ揚ル。        |
| 四 1  | 日光上鉢石町、五左衛門ト云者ノ方ニ宿。     |
| 16   | 図書彈藏より馬人ニ而被送ル。          |
| 七 12 | 申ノ中尅、市振ニ着、宿。            |
| 13   | 市振立。                    |
| 27   | 山中ニ申ノ下尅、着。泉屋久米之助方ニ宿ス。   |
| 28   | 夕方、薬師堂其外町辺ヲ見ル。          |
| 29   | 道明淵、予、不往。               |
| 30   | 道明が淵。                   |
| 八 5  | 翁・北枝、那谷へ趣。良刻、立。大正侍ニ趣。全  |
| 6    | 昌寺へ申刻着、宿。               |
| 6    | 滞留。菅生石天神拜。              |
| 7    | 全昌寺ヲ立。立花・吉崎・塩越・北潟・金津、申  |
| 8    | ノ下刻、森岡ニ着、宿。             |
| 8    | 森岡ヲ日ノ出ニ立テ、福井・府中・今庄ニ着、宿。 |

|    |  |
|----|--|
| 9  | 日ノ出過ニ立。今庄ノ宿ハヅレ、板橋ノツメモヨリ右へ切テ、木ノメ峠ニ趣、谷間ニ入也。右ハ火ウチガ城、十丁程行テ、左リ、カヘル山有。下ノ村、カヘルト云。未ノ刻、ツルガニ着。氣比へ參詣シテ宿カル。唐人ガ橋、大和や久兵へ。食過テ金ヶ崎へ至ル。山上迄廿四五丁。夕ニ帰。カウノヘノ船カリテ、色浜へ趣。戌刻、出船。夜半ニ色へ着。塩焼男導テ本隆寺へ行テ宿。 |
| 10 | 日連ノ御影堂ヲ見ル。巳刻、便船有テ、上宮趣、ニリ。コレヨリツルガヘモニリ。ナン所。帰ニ西福寺へ寄、見ル。申の中刻、ツルガへ帰ル。夜前、出船前、出雲や弥市良へ尋。隣也。金子壺両、翁へ可渡之旨申頼、預置也。  |
| 11 | 天や五良右衛門尋テ、翁へ手紙認、預置。……巳ノ上刻、ツルガ立。……申ノ中刻、木ノ本へ着。   |
| 12 | 木ノ下ヲ立。午ノ尅、長浜ニ至ル。便船シテ、彦根ニ至ル。城下ヲ過テ平田ニ行。鳥本ニ趣テ宿ス。  |
| 13 | 多賀へ參詣、鳥本ヨリ式里戻ル。帰テ、摺針ヲ越、関ヶ原ニ至テ宿。  |
| 14 | 関ヶ原ヲ立。野上ノ宿過テ、南宮ニ至テ拝ス。不破修理ヲ尋テ別龍靈社へ詣。大垣ニ至ル。如行ヲ尋、留主。息、止テ宿ス。   |
| 15 | 辰ノ中尅、出船。申ノ下尅、大智院ニ着。  |

|                               |  |   |         |
|-------------------------------|--|---|---------|
| 九                             | 3  | 16  | 其夜ヨリ薬用。 |
| 辰ノ尅、立。乍行春老へ寄、及夕、大垣ニ着。此夜、木因二会。 | 6  | 辰尅出船、木因、馳走。越人、船場迄送ル。如行、今一人、三リ送ル。錢別有。                          |         |
| おくのほそ道                        |  |   |         |
| 月日                            |  |   |         |
| 本文対比内容                        |  |   |         |
| 三                             | 27   | 弥生も末の七日、……千じゆと云所にて船をあがれば……                                    |         |
| 30                            | 卅日、日光山の麓に泊る。あるじの云けるやう、「我名を仏五左衛門と云。万正直を旨とする故に、人かくは申侍ま、……」   | ※芭蕉はこの人物に、仏教の思想、和光同塵（仏が俗世界に、仮の姿を見せる）・論語の「剛毅木訥の仁に近し」の思想を当てている。 |         |
| 16                            | 農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬには非ず、「いかゝすべきや、されども此野は縦横にわかれてうみく敷旅人の道ふみたがえんあやしう侍れば此馬のとゞまる所にて馬を返し給へ」とかし侍ぬ。ちいさき者ふたり馬の跡したひてはしる。独は小姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりけ |   |         |

|         |                                |  |
|---------|--------------------------------|--|
| 七<br>12 | れは                             | かさねとは八重撫子の名成べし 曾良 頓て人<br>里に至れば、あたひを鞍つばに結付て馬を返しぬ。<br>今日は親しらず・子しらず・犬もどり・駒返しな<br>ど云北国一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせ<br>て寝たるに、一間隔て面の方に、若き女の声二人<br>斗ときこゆ。年老たるおのこの声も交て物語する<br>をきけば、越後の国新潟と云所の遊女成し。伊勢<br>参宮するとして、此関までおのこ送りてあすは古郷<br>にかへす文した、めて、はかなき言伝などしやる<br>也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこ<br>の世をあさましう下りて、定めなき契、日々の業<br>因いかにつたなしと、物云をきく寝入て、あ<br>した旅立に我くむかひて、「行衛しらぬ旅路の<br>うさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えがくれ<br>にも御跡をしたひ侍ん、衣の上の御情に大慈のめ<br>ぐみをたれて結縁せさせ給へ」と泪を落す。「不便<br>の事には侍れども、我くは所々にてとまる方<br>おほし。只人の行にまかせて行くべし。神明の加<br>護かならず恙なかるべし」と云捨て出つ、哀さ<br>しばらくやまざりけらし。 |
|         | 一家に遊女もねたり萩と月<br>曾良にかたれば書とぐめ侍る。 |  |

かさねとは八重撫子の名成べし 曾良 頓て人  
 里に至れば、あたひを鞍つばに結付て馬を返しぬ。  
 今日日は親しらず・子しらず・犬もどり・駒返しな  
 ど云北国一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせ  
 て寝たるに、一間隔て面の方に、若き女の声二人  
 斗ときこゆ。年老たるおのこの声も交て物語する  
 をきけば、越後の国新潟と云所の遊女成し。伊勢  
 参宮するとて、此関までおのこ送りてあすは古郷  
 にかへす文した、めて、はかなき言伝などしやる  
 也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこ  
 の世をあさまじう下りて、定めなき契、日々の業  
 因いかにつたなしと、物云をきく寝入て、あ  
 した旅立に我くむかひて、「行衛しらぬ旅路の  
 うさ、あまり覚束なう悲しく侍れば、見えがくれ  
 にも御跡をしたひ侍ん、衣の上の御情に大慈のめ  
 ぐみをたれて結縁せさせ給へ」と涙を落す。「不便  
 の事には侍れども、我くは所々にてとゞまる方  
 おほし。只人の行にまかせて行くべし。神明の加  
 護かならず恙なかるべし」と云捨て出つ、哀さ  
 しばらくやまざりけらし。  
 一家に遊女もねたり萩と月  
 曾良にかたれば書とゞめ侍る。

曾良は腹を病て、伊勢の国長嶋と云所にゆかりあれば、先立て行に、

行てたふれ伏とも萩の原 曾良と書置たり。行もの、悲しみ、残もの、うらみ、隻鳧のわ

かれて雲にまよふがごとし。予も又、

今日よりや書付消さん笠の露

大聖持の城外、全昌寺といふ寺にとまる。

※ おくのはそ道には、芭蕉は八月五日から八月七日にかけて、那谷寺参詣・永平寺参詣を行った事が記され、七日に全昌寺に宿泊した事が記されている。またおくのはそ道と、曾良随行日記とは、山中宿泊と那谷寺参詣の旅行順序が逆になっている。おくのはそ道「那谷寺→山中」曾良随行日記「山中→那谷寺」

8 全昌寺出立。丸岡着、宿。

9 丸岡出立。天龍寺着、宿。

10 天龍寺滞留。

11 天龍寺出立。福井着、等哉宅訪問。

12 福井滞留。

13 福井出立。今庄着、宿。

14 今庄出立。敦賀着、宿。氣比神宮夜参。

15 敦賀滞留。夜、雨。(中秋名月)

16 種の浜、本隆寺参詣。

17 木之本宿。(推定)

18 春照宿。(推定)

19 関ヶ原着。(推定)

21 大垣着。

九 6 大垣出船。

#### 四、敦賀・種の浜における松尾芭蕉の詠句

おくのはそ道旅行最終段階に差し掛った元禄二年(1689)八月十四日、松尾芭蕉は氣比松原の名月を觀賞すべく、越前国敦賀に立ち寄った。「鶯の関を過て湯尾峠を越れば、燧が城、かへるやまに初鴈を聞て、十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜、月殊晴たり。」と、越前の十五夜の前夜の情景を觀賞し、明日の十五夜の情景に期待を寄せて、芭蕉は「あすの夜もかくあるべきにや」と宿の主人に語ったところ、宿の主人は「越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたし」と、一抹の不安を芭蕉に覗かせて、宿の主人は氣比神宮の夜参を芭蕉に勧める。神宮境内は、「社頭神さびて、松の木の間にも月のもり入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。」で、遊行上人の大願発起の伝説も聞いて、芭蕉は「月清し遊行のもてる砂の上」の句を吟じた。

翌十五日は亭主の詞にたがわず雨が降り、名月觀賞を楽しんでいた芭蕉の期待は完全に裏切られて、「名月や北国日和定なき」の句を詠んで残念がった。見られなくなった

名月の句を残す事も、また風雅の一つであると、芭蕉が心得ていた事は言うまでもない。

十六日は前夜と異なつて空は晴れ、芭蕉はますほの小貝を拾い、西行法師の歌枕を尋ねるべく、種の浜に向かつてその浜の寂しさに感動した。「寂しさや須磨にかちたる浜の秋」と芭蕉は句を詠じ、「浪の間や小貝にまじる萩の塵」と、浜辺に散らばるますほの小貝の美しさにも感動した。ますほの小貝とは、一センチにも満たない小さな薄桃色の二枚貝である。芭蕉が句に詠んだように、萩の花と見紛う美しい色の貝である。

松尾芭蕉がおくのはそ道旅行で詠んだ敦賀・種の浜の句は、この四句だけだと心得ていたが、昭和三十四年（1959）大垣市内の安田錦石氏より、大垣市立図書館に、荊口句帖の写本が寄贈された。この荊口句帖とは、松尾芭蕉の門人であり、大垣藩士・大垣の俳人である宮崎荊口と、その息子である宮崎此筋・岡田千川・秋山文鳥を中心とした発句・連句の書留で、巻頭にある路通の「芭蕉翁月一夜十五句序」により、おくのはそ道の旅で芭蕉が大垣に到着した日が八月二十一日であった事が判明、更におくのはそ道には収録されていない福井から敦賀までの芭蕉の詠句の存在も判明した。おくのはそ道未収録の句は、宮崎荊口宅でおくのはそ道旅行後句会が開催され、芭蕉も出席してその句会で詠まれたか、おくのはそ道旅行中の芭蕉の

詠句として披露されたかの何れかであろう。後に芭蕉の句十五句（荊口句帳写本には、「いま一句きれて見えず」と記されており、実際には十四句収録）がまとめられて荊口句帳に収録されたのであろう。松尾芭蕉はおくのはそ道旅行中等萩を尋ねるべく福井に立ち寄っているが、おくのはそ道には福井での詠句、あるいは福井訪問に関する詠句は、一句も収録されていない。その詠句も含めての「芭蕉翁月一夜十五句」である。

福井洞栽子をさそふ

名月の見所問ん旅寝せむ

阿曾武津の橋

あさむづを月見の旅の明離

玉江

月見せよ玉江の芦をからぬ先

ひなが嶽

※あすの月雨占はんひなが嶽

木の目峠いもの神也と札有

月に名をつゝミ兼てやいもの神

燧が城

義仲の寢覚の山か月かなし

越の中山

※中山や越路も月ハまた命

氣比の海

※国（く）の八景更に氣比の月

同明神

○月清し遊行のもてる砂の上

種の浜

衣着て小貝拾はんいろの月

金が崎雨

月いづく鐘ハ沈める海の底

はま

※月のミか雨に相撲もなかりけり

ミなど

※ふるき名の角鹿や恋し秋の月

うミ

○名月や北国日和定なき

いま一句きかれて見えず

荊口句帖収録句十四句のうち○印二句は、おくのほそ道に収録されているが、※印五句は何れの句集にも収録されておらず、もし荊口句帖写本の寄贈がなかったら、この五句の存在を我々は知る事が出来なかったであろう。

芭蕉のおくのほそ道旅行中、敦賀・種の浜詠句中に、今一句おくのほそ道にも、荊口句帖にも収録されていない詠句がある。その詠句は薦獅子集（撰集、巴水編）や泊船集（芭

蕉句文集、風国編）には「いろの浜に誘引れて」と題されて、

「小萩ちれますほの小貝小盃」と詠まれて収録されている。

この句は宝永六年（1709）頃、伊賀上野の俳人服部土

芳によって刊行された芭蕉の句集蕉翁句集草稿に、「この

句泊船集に有。細道に、浪の間や小貝に交る萩の塵」と云

句有。此直しの前の前の時の句かと、引句とす」とあって、

それによってこの句は「波の間や」の句の初案形とされて

いる。

松尾芭蕉はおくのほそ道種の浜の文章に、「浜はわづか

なる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飲み酒

をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ感に堪たり。」と白楽天

の「林間に酒を煖めて紅葉を焼く。」の詩を髣髴させながら、

「寂しさや須磨にかちたる浜の秋」の句と、「浪の間や小貝

にまじる萩の塵」の二句を添え、「其日のあらまし等哉に

筆をとらせて寺に残す。」と、種の浜の文章を締め括った。

等哉に筆をとらせた文章とは、左記の文章で、現在でも種

の浜本隆寺（法花寺）に、等（洞）哉が認めた懷紙が残さ

れている。

氣比の海の景色に愛で、種の浜に移りてますほの小貝と

よみ侍りしは、西上人の形見なりけらし。されば所の小

童までその名を伝へて汐の間をあさり、風雅の人の心を

慰む。

下官年比思ひ渡りしに、此度武江芭蕉桃青巡<sup>めぐ</sup>の序、この浜に詣で待る。同じ舟に誘はれて小貝を拾ひ、袂に包み、盃にうち入れなどして、彼の上人の昔をもてはやす事になむ。

越前 福井 洞裁書

小萩散れますほの小貝小盃 桃青

元禄二年 中秋

西上人とは西行法師の事、種の浜は西行法師歌枕の地である。西行法師はこの地で「潮染むるますほの小貝拾ふとて色の浜とは言ふにやあるらん」（山家集 下雑一一九四）と詠み、この歌に因んで松尾芭蕉が、ここ種の浜で、「小萩散れますほの小貝小盃」の句を詠じたのである。

## 五、敦賀・大垣間の芭蕉・曾良の行程

松尾芭蕉は加賀国山中での河合曾良との離別に、「曾良は腹を病<sup>ふ</sup>て、伊勢の国長嶋と云ふ所にゆかりあれば、先立<sup>さきだ</sup>て行<sup>ゆ</sup>に、『行々<sup>ゆき</sup>たてたふれ伏<sup>ふ</sup>とも萩の原 曾良』と書置たり。行<sup>ゆく</sup>もの、悲しみ、残るもの、うらみ、隻<sup>せき</sup>鳧<sup>ふ</sup>のわかれて雲にまよふがごとし。予も又『今日よりや書付消さん笠の露』とおくのはそ道に、劇的・感情的に記述しているが、曾良随行日記は極めて冷静に、客観的に「五日朝曇。昼時分、翁・

北枝、那谷へ趣。明日、於小奈二、生駒万子為出会也。則請ジテ帰テ、良刻、立。大正侍二趣。全昌寺へ申到着、宿。」と何事も起らなかったかのように、予定の行程を記述している。尤も猿蓑には「いづくにかたふれ伏共萩の原」の句が収録されており、七月二十一日・二十二日の金沢での随行日記には薬を請求したり、二十三日には「予、病氣故不行」の記述があつたり、八月十六日の長嶋の記述には尋ねて来た森氏と病牀の談をしたり、「其夜ヨリ薬用」と記してあるから、曾良が体調を崩していた事は事実である。

松尾芭蕉は八月十六日、種の浜の西行法師の歌枕を尋ね、法花寺（本隆寺）にその日のあらましを等裁に筆を取らせ、懷紙を残させた後は、「駒に助けられて大垣の庄に入る」間の事は、おくのはそ道には何も記していないし、他の俳文等にもその間の記録は全く存在しない。従つて推定ではあるが、八月十七日は木之本（滋賀県伊香郡木之本町）に、十八日は春照（滋賀県坂田郡伊吹町）、十九日は関ヶ原（岐阜県不破郡関ヶ原町）に宿泊し、二十日は美濃国赤坂の金生山明星輪寺に参詣、「鳩の声身に入みわたる岩戸哉」の句を詠んで、大垣到着は二十一日頃ではなかったかと推定されている。

おくのはそ道旅行における敦賀・大垣間の芭蕉の行程に對して、随行日記における曾良の行程は、非常に正確・几帳面に記録されていて、それによると曾良は八月十一日に



敦賀を出立し、木之本には当日の申の中刻頃到着して宿泊。翌八月十二日に木之本を出立して、午の刻に長浜に到着、船便で彦根へ。平田經由島本に到着して宿泊。八月十三日は多賀大社に参詣し、関ヶ原へ。翌八月十四日に南宮大社に参詣し、同日大垣に到着している。

「腹を病て」先立ったはずの河合曾良が、目的地伊勢国長嶋に直行するのではなく、何故に木之本から近江路に向かったのだろうか。近江路には、米原付近に西行法師の歌枕がある。現在の米原市朝妻である。

おぼつかない伊吹風の風先に

朝妻舟は会ひやしぬらん

（山家集中雑一〇〇五）

樽舟よ朝妻わたり今朝なせそ

伊吹の嶽に雪風巻くめり

（山家集中雑一〇〇六）

勿論伊吹山も西行法師の歌枕である。彦根には芭蕉の知人もおり、犬上郡鳥籠山は歌枕としても有名な地である。更に琵琶湖東岸南部になるが、西行法師の歌枕として野路（草津市野路町）・野洲が原（野洲郡野洲町）がある。西行法師は「近江路や野路の旅人いそがなん野洲が原とてとほからぬかは」（山家集中雑一〇〇七）と詠んでいる。

河合曾良が近江路に向かったのは、これら西行法師の歌枕の下見であつたり、芭蕉宿泊等の下準備だったのではな

からうか。芭蕉が木之本・春照・関ヶ原經由大垣への行程を、敢えてとつていたとしたら、曾良の近江路下見の行程は無駄になる。それに芭蕉が敦賀から木之本・春照・関ヶ原經由、大垣への行程をとつたという確証はない。おくのほそ道文末の種の浜から大垣への直行的表現によつて、時間的・距離的に推測されているに過ぎない。曾良がとつた敦賀・木之本・近江路・関ヶ原・大垣の行程と、芭蕉がとつたと思われる推測行程、即ち敦賀・木之本・春照・関ヶ原・大垣行程とは、時間的・日格的には大差はない。曾良がとつた行程は、芭蕉がとつたと思われる推測行程よりも、随分西側に大回りしたかに見えるが、距離的に差はない。

おくのほそ道旅行中、敦賀・大垣間において、文章はおろか芭蕉の詠句が一句も見られない事について、関ヶ原は日本史を変える大きな事件の舞台であるが、壬申の乱は千年以上以前の乱であり、芭蕉にとつてはあまりにも遠い時代の事件であつて関心が薄く、また関ヶ原の合戦は僅か百年にも満たない時代の事件であつて、あまりにも生々し過ぎて、却つて句作にならなかつたと説明している研究者もいるが、貞享元年（1684）に行われた野ざらし紀行の旅では、芭蕉は常磐御前の塚を訪れて、「義朝の心に似たり秋の風」と詠み、源朝長の墓前では「苔埋む薦のうつつの念仏哉」と詠んでいて、芭蕉の心、必ずしもそうだとは言ひ切れない。

## 六、おくのほそ道記載地名

松尾芭蕉のおくのほそ道旅行行程は、元禄二年（1689）三月二十七日江戸深川を立出して、日光・白川関・仙台・松島・平泉・出羽三山・象潟・金沢・敦賀と巡り、八月二十一日頃大垣に至っている。その旅行日数は約六箇月間、旅行距離数は約六百里、松尾芭蕉最大の大陸行である。当然松尾芭蕉は多くの場所に立ち寄り、多くの地名を本文中に記録した。その地名数は一八六箇所、おくのほそ道の旅行は、東北・北陸の歌枕の地を尋ねる旅行でもあったので、記載されている地名の中の四十三箇所が、歌枕の地名で、その百分率は二三・一％に及ぶ。

このおくのほそ道本文に収録されている一八六箇所の地名は、おくのほそ道旅行範囲の代表的な地名が中心であって、芭蕉と曾良が実際に立ち寄った箇所はもっと多く、事実曾良随行日記に記録されている地名は、江戸深川から美濃国大垣までの実際の立ち寄り箇所は、四一三箇所に及ぶ。その立ち寄り箇所数は、おくのほそ道収録地名数一八六箇所の約二・二倍に及ぶ。当然一日のうちに立ち寄った箇所も多く、曾良随行日記によれば、一日の中での立ち寄り箇所数十箇所が二日、十一箇所・十二箇所が二日ずつ、十三箇所が五日、十四箇所・十五箇所が一日ずつ、十八箇所が一日、五月十四日には一ノ関や岩出山等に立ち寄るのであ

|       |        |       |       |
|-------|--------|-------|-------|
| 不二の峰  | 白石     | 中尊寺光堂 | 駒返し   |
| 上野    | 笠島の郡   | 南部道   | 新潟    |
| 谷中    | 藤中將    | ○岩手の里 | 伊勢    |
| 千住    | ○美豆の島  | 黒部四十  |       |
| 奥羽    | 箕輪     | ○小黒崎  | 八ヶ瀬   |
| 草加    | 形見の薄   | 鳴子の湯  | ○那古浦  |
| ○室の八嶋 | 岩沼     | 尿前の関  | ○担籠   |
| 日光山   | ○武隈    | 出羽の国  | ○有磯海  |
| 御山    | ○名取川   | 大山    | ○卯の花山 |
| 二荒山   | ○宮城野   | 封人の家  | 俱利伽羅峠 |
| 黒髪山   | 仙台     | 最上の庄  | 金沢    |
| ○象潟   | ○玉田    | 尾花沢   | 大坂    |
| 裏見の滝  | ○横野    | 立石寺   | 小松    |
| 那須黒羽  | ○榴が岡   | ○最上川  | 太田神社  |
| 那須篠原  | ○木の下   | 陸奥    | 山中の温泉 |
| 玉藻前古墳 | ○松島    | 山形    | 白根が嶽  |
| 那須八幡宮 | 塩竈     | ○基点   | （白山）  |
| 修験光明寺 | ○壺碑    | 板敷山   | 那谷寺   |
| 行者堂   | 市川村    | 酒田    | 那智    |
| 雲岸寺   | 多賀城    | 白糸の滝  | 谷汲    |
| 仏頂和尚  | ○野田の玉川 | 仙人堂   | 石山寺   |
| 山居跡   | ○沖の石   | 羽黒山   | 伊勢国長嶋 |
| 殺生石   | ○末の松山  | 南谷別院  | 大聖持   |
| 芦野の里  | ○塩竈の浦  | 羽黒権現  | 全昌寺   |
| ○遊行柳  | ○籬が島   |       | 汐越の松  |

るが、その日には、一日で二十箇所立ち寄っている。勿論時間と距離・天候等の問題もあるが、それにしてもハード・スケジュールである。江戸時代の成人歩行距離数は、平均で一日五里（約二十km）だと言われ、街道の宿場と宿場の間隔も、それによって決められていると言われている。それにしても芭蕉と曾良は随分と健脚の持ち主であり、随分多くの箇所を立ち回ったものである。天候状態の悪さ、激しい降雨の為に、一日中あるいは数日間歩けない日もある。句会等の為にその地に一日中、あるいは数日間留まらなければならぬ場合もある。おくのほそ道旅行の三月二十七日から八月二十一日頃は、太陽暦で表すと、五月十六日から十月三日頃に相当する。太陽暦六月中旬から七月下旬にかけては梅雨の季節、九月は秋の長雨の季節であって、おくのほそ道旅行中の季節は、天候に恵まれた季節であるとは言えない。寧ろ天候不順の季節であったと言える。

## 七、おくのほそ道旅行中の気象状況

松尾芭蕉と河合曾良とが共に歩いた江戸深川から加賀国山中までのおくのほそ道旅行日数は一四四日間、その間の天候の様子が曾良随行日記に記録されている。

|        |        |       |       |
|--------|--------|-------|-------|
| ○白川の関  | 塩竈明神   | 月山    | 吉崎の入江 |
| ○阿武隈川  | ○雄島の磯  | 湯殿山   | 永平寺   |
| ○会津根   | ※洞庭湖   | 鍛冶小屋  | 天龍寺   |
| 岩城     | ※西湖    | 鶴が岡   | 福井    |
| 相馬     | 扶桑     | 温海山   | 比那が嵩  |
| 三春の庄   | ※浙江    | 吹浦    | ○浅水橋  |
| 常陸     | 瑞岩寺    | 鳥海山   | ○玉江の芦 |
| 下野     | ○姉齒の松  | 蟹の苦屋  | 鶯の関   |
| 影沼     | ○緒絶の橋  | 能因島   | 湯尾峠   |
| 須賀川    | 石の巻    | 神功后宮  | 湯が城   |
| 檜皮の宿   | 金花山    | 御墓    | ○帰山   |
| ○安積山   | 袖の渡り   | 干満珠寺  | ○敦賀の津 |
| 二本松    | ○尾駁の牧  | 有耶無耶関 | 氣比明神  |
| ○黒塚の岩屋 | ○真野の萱原 | 秋田    | ○種の浜  |
| 福嶋     | 戸伊摩    | 汐越    | ○法花寺  |
| 月の輪の渡  | 平泉     | 北陸道   | ○須磨   |
| 瀬の上    | 金鶏山    | 加賀の府  | 美濃国   |
| 飯塚の里   | 高館     | 鼠の関   | 大垣の庄  |
| 鯖野     | 北上川    | 越後    |       |
| 丸山     | 南部     | 越中の国  |       |
| 飯塚     | 衣川     | 市振の関  |       |
| 桑折     | 和泉が城   | 佐渡    |       |
| 伊達の    | ○衣が関   | 親知らず  |       |
| 大木戸    | 南部口    | 子知らず  |       |
| ○鑑摺    | 中尊寺経堂  | 犬戻り   |       |

○印：歌枕  
※印：中国の地名

|     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 快晴  | 四二日 | 雨後晴 | 七日  | 曇   | 一〇日 |
| 晴れ  | 一九日 | 雨   | 三四日 | 雷雨  | 一日  |
| 晴後雨 | 四日  | 曇後雨 | 一日  | 無記録 | 一八日 |
| 曇後晴 | 三日  | 時々雨 | 五日  |     |     |

雨・曇り・雷雨等の日数が六十五日、旅行全日数の四五%を占めている。悪い気象条件のもとで、おくのほそ道旅行は行われたのである。その旅行が始まってから間もなく、四月十八日、那須湯本宿泊第一日目に、芭蕉達は地震に見舞われている。曾良随行日記に、「十八日卯尅地震す。」と記録されている。現代で言えば、午前六時頃、起床の時間滞に、那須地方に地震が発生したのである。震度はわからないが、寝起きの時間に地震が発生して、人々は驚き慌てふためいたのではなからうか。だが松尾芭蕉はその事をおくのほそ道に記録していない。地震の被害が出なければ、芭蕉は早朝に起きた地震よりも、当日の午後快晴の天候のもと、農夫に馬を借りて、那須の高原を走らせた事の方が、記録に値したのである。曾良は随行日記に、「午の尅、高角左衛門宿ヲ立。暫有テ快晴ス。馬尅疋、松子村迄送ル」と記している。

松尾芭蕉は数多く旅行しているが、どちらかと言えば天候・気象条件に関しては、無関心な事が多いのではなからうか。それにおくのほそ道は紀行文であるとは言え、文章内容に関しても、表現についてもかなり虚構化されていて、

例えばおくのほそ道旅行が始まった頃、曾良は随行日記に「廿七日夜、カスカベニ泊ル。」とのみ記し、「廿八日、マ、ダニ泊ル。カスカベヨリ九里。前夜ヨリ雨降ル。辰上尅止ニ依テ宿出。間モナク降ル。」と記載しており、どうも天候不順の中を出発した感じがするが、おくのほそ道冒頭部分では、「弥生も末の七日、明ぼの、空朧々として、月は在明にて」と、出発に相応しい天候に表現されている。また五月十五日頃、尿前の関で封人の家を見掛けて宿泊を頼み、「三日風雨あれてよしなき山中に逗留す。」とあるが、曾良随行日記には十五日は小雨、十六日は堺田に滞留し大雨、十七日は快晴で堺田を出立している。大雨は堺田滞留の十六日だけである。おくのほそ道冒頭部分の「弥生も末の七日、明ぼの、空朧々として」は、源氏物語帚木巻の「月是有明にて光をさまれるものから、かげさやかに見えてなかなかをかしきあけぼのなり」を踏まえた表現であり、芭蕉の文章にはそれが紀行文であっても、現実的描写よりも、浪漫的叙情的表現を重視する虚構性が目立つ。

## 八、曾良随行日記の役割り

松尾芭蕉はおくのほそ道旅行の随行者に、当初は古典や仏典に精通していた路通を予定していたらしい。ところが路通は出発二箇月前になって、突然姿を晦まして江戸から

消えてしまった。仕方なくその代役として、河合曾良が選ばれたらしい。

曾良は几帳面に旅行行程を記録し、日付・天候・旅程・宿泊所・距離数等を、詳細に記録して行った。本稿冒頭に記した如く、この記録文は当初は無題であったが、文章内容や文体等が日記風に記録されている事によって、後の研究者や注釈者達によって、随行日記や旅日記等の名称があらがわれた。

おくのほそ道は紀行文だとは言え、旅行そのものは事実であっても、内容的・表現的に虚構性が強く、おくのほそ道を研究する上において、真実・事実を記録している曾良随行日記は、非常に大きな役割りを果たしている。

芭蕉が最初に随行者として選んでいた路通だったら、彼の不確実性・軽薄な性格故、彼に詩的才能・芸術的才能があっても、曾良のような記録を残す事は出来なかったであろう。

このように河合曾良の几帳面さ、真実性は、勿論芭蕉の大きな信頼を得るのであるが、その河合曾良の信頼性は芭蕉にのみ留まるのではなく、後に幕府の大きな信頼を得る事となり、曾良は宝永六年（1709）幕府諸国巡見使に拔擢任命され、更に経理担当任務の役も幕府より授けられるのである。

河合曾良がおくのほそ道随行日記を記録していた事に

ついては、古くから噂されていたが、それが昭和十四年（1939）、曾良自筆の原本が発見されたのである。それはおくのほそ道素龍清書本完成、即ち元禄七年（1694）四月の二四五年後に当たる。その自筆原本の蓋然性の高い事から、その原本はその後のおくのほそ道研究に大きく貢献し、今日のおくのほそ道研究に至っている。原本は現在、天理大学図書館に収蔵されている。

#### 参考文献

『おくのほそ道 附曾良随行日記』 岩波文庫 一九五七年刊

『松尾芭蕉集・紀行・日記編』 小学館新編日本古典文学全集

一九九七年刊

『荊口句帖』（複製・翻刻）大垣市文化財保護協会 二〇〇四年刊

『河合曾良』 諏訪市教育委員会 二〇一一年刊

（つねまつ ただし）